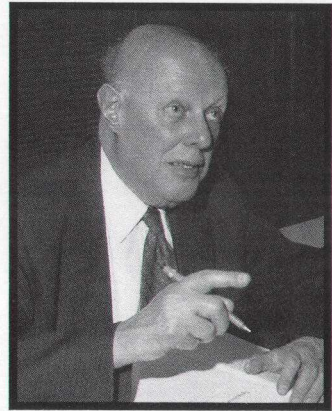


ロジノ先生の思い出

イタリア天文学界の重鎮で、半世紀以上にわたって超新星・新星・長周期変光星・球状星団・その他の分野で大きな業績を残されてきたロジノ先生が7月31日に心臓疾患のため亡くなりました。私には先生の仕事の全体像を紹介する事はできませんが、個人的な思い出を中心に日本ではあまり知られていない先生の横顔を紹介させていただきたいと思います。

先生は1915年ベネチアの少し北のトレヴィーゾで生まれ、パドバ大学を卒業、最初はボローニヤ、そして、その後は長くパドバ大学において研究を続けてこられました。「半世紀以上」と言うのは決して誇張ではなく「戦争中は空が暗くて星がよく見えたが、しばしば停電があつてね、仕方がないから手で望遠鏡を動かしながら観測したものだ」などという話をしてくれたことがあります。先生の重要な仕事の一つはエカー山の182cm望遠鏡の建設です。「私が政府の役人と交渉した時に『この望遠鏡の解像力はシーイングの限界よりずっと良いです。』と言ったら、彼は『なるほど、つまりその望遠鏡を使うと目で見るよりも星がよく見えるという事ですか』と言ったんだ。私はそんな事から説明しなければならなかったのだよ」と苦労話を聞かせてもらった事もあります。その望遠鏡は先生の苦労のかいあって1973年に完成、現在も第一線で活躍しています。「観測の神様」と言ってもよいような先生ですが、なぜか写真乾板の扱い方を知らないというとんでもない欠点がありました。「ドクターイジマ、これが今度出たノバだ」と言って乾板の上に鉛筆で印を付けてしまうのです。間違えると「いや違った、その隣だ」と言って前の印を消しゴムで消してまた印を付けたり、消しゴムが見つからないと指でこすって消したりするのです。先生のやる事に文句を言えるような人間はイタリアにはいません。恐るおそる「写真乾板は手で触ら



天文台の自室で質問に答えるロジノ先生

ないほうがよいのではないのでしょうか」と言っても「なぜだ、私の手は汚れていないぞ」と言って平気なのです。アジアゴには超新星のサーベイのために撮影された膨大な乾板が保存されていますが、大部分は先生の手で汚染されているのでそれらを改めて解析して別の目的に使うのは難しいようです。ここ数年はさすがに観測の現場に来る事はなくなりましたが、我々に「これこれの天体を観測してデータを持ってこい」と言って観測させて、研究を続けてこられました。亡くなる二週間前にも私が1995年のカシオペア座の新星の最近のスペクトルを見せに行くと「この段階でシリコンの輝線がこんなに強いノバは見た事がない、IAU Circularにすぐ報告しなさい」とアドバイスしてくれました。その時に「『仕事を辞めて家でのおんびりしろ』とか『好きな事をやって余生を楽しめ』とか色々言われるのだが、私はこうやって観測データを手にしてあれこれ考えるのが一番楽しいのだよ」と言って笑っておられました。

享年81才、御冥福を祈りたいと思います。

飯島 孝 (イタリア・パドバ天文台)